

第十一号

「春の海」

メルマガnoichi第十一号、今月のテーマは『春の海』。

天才作曲家・宮城道雄が故郷の浦にインスピレーションを得て作曲した『春の海』は、来日したフランス人女流ヴァイオリニストのルネ・シュメーとの共演により、邦楽曲としては嘗てない規模で広く認知されました。その後も『春の海』は、時代を越えて、ジャンルを越えて、海を越えて、今日でも多く演奏されています。

今回は永遠の名曲『春の海』を検証する上で、心強い御二方のゲストをお迎えしました。いざ、名曲の秘密に迫ります。

『名曲』とは、一体なんだろうと思うことがあります。

名曲を定義付けるのは難しいですが、敢えて紐解くための必要条件を考えると、ここは『人気』と『寿命』が二大要素になってきそうです。まず近現代で考えると、「人気」を計る目安はやはりCD（レコード）の売り上げでしょうか。音楽史上最も売れたレコードは、ビング・クロスビーの『ホワイト・クリスマス（white christmas）』、なんと推定五千万枚以上という脅威の数字。ご参考までに二位はエルトン・ジョンの『キャンドル・イン・ザ・ウィンド（Candle in the wind）』、こちらは三千五百万枚超。日本で一番売れたシングルは子門真人の『およげ！たいやきくん』、450万枚超の大記録。デジタル時代に移行した今日では、ホワイト・クリスマスと共に破られることのない不滅の記録だと思えます。では次に、以上に挙げた三曲を寿命の点で考えてみるとうか。ホワイト・クリスマスは、日本ではさほどでもないですが、アメリカではクリスマスの象徴的音楽で、シーズンになると映画や街中のあちこちで聴かれます。『キャンドル・イン・ザ・ウィンド』は、記憶に新しいダイアナ妃の追悼式典でのエルトン・ジョンによる献曲でしたが、かえってそのイメージが強過ぎて、今日では流しにくい音楽になってしまった、というところだと思います。『およげ！たいやきくん』は、当時私も観ていた子供番組「ひらけ！ポンキッキ」のオリジナルナンバーとして放映されていました。この曲、けっこう悲劇的な内容だったと思いますが、そんな曲が日本一というところに日本人の気質を感じたりもしますが、まず今日の若者は全然知らない曲だろうと思います。

再演、のちにカバーされた曲も少し覗いておくと、年末の定番となったベートーヴェンの『第九』のあの有名なメロディや、シャンソンの『枯葉』がジャズのスタンダードになったり、ビートルズのナンバー『Help!』『Yesterday』『I want to hold your hand』他マイケル・ジャクソンの『Bad』…。日本では坂本九の『上を向いて歩こう』、最近では由紀さおりの『夜明けのスクエイト』がアメリカで大ブレイクなどなど、名曲と呼ばれるものは国（言葉の壁）や音楽の境界線をも越えてゆく力があるようです。

さて、以上のことを踏まえ、いよいよ最後に考えたいのが本題、邦楽の名曲です。もう、私の意向をお汲み取り頂けているかと思いますが…。

誰もが親しめるあのメロディ。再演数、録音数、色々な楽器に編曲されて、世界中で演奏されて…そう、それが今回のテーマ『春の海』。宮城道雄の『春の海』は、きっと今日もどこかで演奏されています。

《春の海》のころ

箏曲家・学術博士 安藤政輝

小さかった頃、《春の海》が弾きたくてしかたありませんでした。しかし、なかなか教えていただけません。演奏を頼まれても、「まだお習いしていませんから…」とお断りするしかありませんでした。しかしある時、突然弾く機会が訪れました。昭和37年（1962年）4月、朝日新聞社主催の「朝日ジュニアオーケストラ全日本合同発表演奏会」（東京文化会館）で、演奏することになったのです。喜代子先生、数江先生、奥様が、「着物はどうしようか、黒では子どもらしくないし…」と相談なされた結果、紺色の着物を作ってくださいました。初めての着物です。袴の紐は喜代子先生が結んでくださいました。

《春の海》には、一般的ではない奏法が多く含まれています。「一般的ではない」ということは、「弾きにくい」に通じます。冒頭左手の「三・六七」で、薬指と小指を四にひっかけておいて「三」をしつかり弾くこと、それに続く右手「八十斗十八」の指づかい。左手の「三・五」などの繰り返し、「四九・五十一・六斗・五十」を弾くときに上にはね上げないで下に押し付けて弾くこと、などが例としてあげられるでしょう。

私自身、どうしたら冒頭「八十斗十八」の五つの音が大きく、かつきれいな音色で粒をそろえて弾けるようになるのか、何でこんなに弾きにくいんだろうと人差し指の使い方、苦労したことを覚えていきます。しかし、弾き方が違えば出てくる音色も違ってきます。作曲者が「このような音がほしい」と考えて、その音を出すために奏法を考えたわけですから、後世の人が楽譜と音源だけを頼りに、単に「弾きにくいから」といって、奏法を変えてしまうことには疑問を感じます。

ところで、冒頭の「三・六七」の「三」は、楽譜に示さ



れているよりも長めに演奏するのですが、その長さは一定ではありません。大まかにいえば、2小節目ごとの組になっていて、2小節目は1小節目より短くなっています。《春の海》を弾くまでは、いかに一定なリズムを保つか、ということに腐心をしていたのですが、この曲によって、楽譜通りに弾くのが「音楽」ではない、ということを教わりました。これからは先生から教えていただいた「ころ」を大切に、演奏・指導をしていきたいと思っています。

「春の海」曲を通じた心のリレー

尺八演奏家 藤原道山

「春の海」について若輩の私が語るのは畏れ多いことですが、私のこの曲に関する思い出から、お話させて頂きたいと思います。

祖母と亡き母共に箏を教えておりましたので、幼かった頃、稽古場の棟越しに何時間も稽古の音を聴いていました。その中で、自然と宮城先生の曲が耳に入り、次第にレコードを聴き、演奏会に行くようになりました。尺八を始め、お箏のおさらい会に声をかけて頂くようになりました（特に安藤政輝先生には多く勉強の機会を頂きました）。高校の頃、宮城会の浴衣会で「春の海」を演奏することになり、宮城喜代子先生のお稽古がございました。私にとつて雲の上の存在である先生が目の前にいらっしやるだけで緊張で固まっていたのですが、ある部分はどうしても箏と合わなくていたところ、喜代子先生が「私が弾くから、あなた、吹いて」とおっしゃったのです。舞台やレコードで聴いていた音が目の前から聴こえて来て、その時の胸の高鳴りは今でもはっきり覚えています。無我夢中で吹き「よくお箏を聴いているね」と笑顔で仰ってくださいましたことが本当に嬉しかったです。

問題箇所は、最初から数えて14小節目の尺八が16分待ち、箏が8分待つて入る部分で、箏が飛び出しやすく、また尺八はリズムを崩しやすい所でもあります。ここを何度か合わせて頂き、「この間（ま）で入るのよ」と箏の方に指導されておられました。それから、喜代子先生は五線譜を取り出し「この部分にはテヌートが入っているでしょ。大切に吹いて」など様々な指導を下さいました。私が今、演奏する時そして後進に教える時、必ずこの時のことを思い出します。

私はいつも自分を通して作曲者の思いを音にしていきたいと思っています。そのためには先人が伝えてきた事を知ることが大切だと思っています。知ること曲の理解が深くなると思うのです。まだまだ思いは至りませんが、さらに深い演奏が出来ればと思っています。

TNBのそれっぽい話 8

三味線演奏家 (http://amado.jp/rnb-zz) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかったり)します。

最近よく「逆に」なんていう言葉から会話を始める人がいますが、実際に逆の意見を言うつもりでもなく使う場合も多いようです。

古代中国において「陰陽思想」なんてのがありますが、物事はすべて二つの相反するものから成り立つという考えで、例えば、太陽があれば月があり、晴れがあれば雨が、男がいれば女がいて、デジタルにはアナログ、インドア派にアウトドア派、肉食系には肉食系等々…。漢字の熟語にも高低・強弱・天地など、真逆の意味の組

み合わせて構成されるものもあります。

日本の伝統音楽にも陰陽思想がそのまま使われているものがあります。それは、主に地歌や「さくらさくら」などに用いられている都節音階、雅楽や「君が代」などに用いられている律音階で、前者を「陰音階」、後者を「陽音階」と呼びます。

「春の海」といえば、誰もが一度は耳にしたことがある名曲ですが、逆に、「湖辺の夕」(一九二六年 宮城道雄作曲 箏・尺八・胡弓三重奏)というあまり聞かれないう名曲があります。瀬戸内海の穏やかな表現に対して、箱根芦ノ湖の物悲しい夕暮れを陰の調絃で表現した曲。海と湖、相反する曲調を踏まえると、それぞれの曲に対する姿勢や表現に深みを与えてくれるように思います。

Chef Noichi's Special Recipe

今回は、**簡単焼きバナナ**。お菓子は簡単が一番。



作り方

1. バナナを皮ごと洗う(黒くなったものの方が甘くて美味しい)。
2. 水気を拭きとり、魚焼きグリルに皮ごと入れる。←皮むいたら、バナナ焦げちゃうよ。
3. 約8分、真っ黒になるまで焼く。
4. お好みでパニラアイスやチョコソースを添えても。
バナナが温かいうちに召し上がれ!! Bon appetit!!

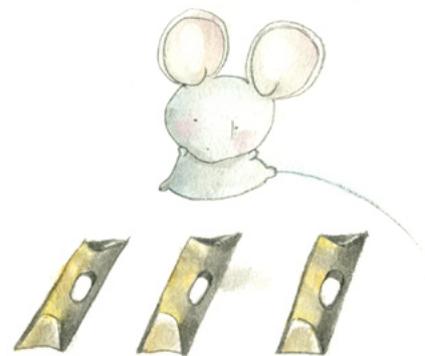
以上!簡単!!お試しあれ!!!

レシピ提供:

Latelier de KANDEL Tokyo (パンとお菓子の工房カandel) 店長: 奥田有香

邦楽英単語講座・その十: 駒

bridge



Translated by noriko morikawa
Illustration: urara okuda

◎あとかぎ◎

春の海というと、のんびりと穏やかな、あたたかい春の風景を思い浮かべるのが普通だろう。しかし海の中の温度(海水温)と陸の気温との間にはズレがあり、「海の中は三ヶ月遅れ」だと言われている。ということは「春の海」の海の中はまだ真冬。2月だとすると、かなり冷たい。魚たちは遅い春をまだかまだかと待ちながら、縮こまっているに違いない。

そう思って「春の海」を聞いてみると、少し印象が違ってくる。澄み切った青空を流れる雲のように曲線的に揺れる尺八に対し、リズムカルで直線的な波が連続的に押し寄せる箏の音。二つの音は黒バックに筆で描かれた暖色と寒色のように、鮮やかに見えてくる。尺八はすでに春。海に向かってゆったりと語りかけているよう。海の方はというと、あくまでマイペースで少しずつ春に向かって準備しているようだ。(あくまで個人的な感想です)。

グラフィックデザイナー (http://www.w1938.jp) みやはらたかお



メルマガ noichi は生田流正派邦楽会・奥田雅楽之一 (http://www.utanoichi.jp) が『邦楽』を様々な角度からアプローチするメールマガジンです。

発行/ noichi メルマガ編集部 editor: gako niimi design: takao miyahara noichi 公式ツイッター http://twitter.com/#!/mlmg_noichi * 配信申し込み・ご意見・お問い合わせは mailmagazine@utanoichi.jp まで